

## 「のび太と空の理想郷」に関する考察

### ~理想の否定と現実の受容~

京都大学 4 回生 村越知晟

#### 1. はじめに

今年、「のび太と空の理想郷」(以下、本映画)が公開され、昨年公開された「のび太の宇宙小戦争 2021」の約 1.5 倍の興行収入を記録した。本映画は、現代社会に対して強いメッセージ性を含んでおり、これまでの映画と比較しても異色な内容であったと考えられる。今回は、どのような点が異色であったかを従来の映画と比較することで考察し、この映画が何を伝えたかったのかについて考える。なお、以下は映画のネタバレを多く含むため、以下の文章を読む際は注意してほしい。

#### 2. これまでの映画との比較

本映画の一番異色であると言える点は、タイトルに「理想郷」を謳っているながら「理想」そのものを否定している点である。本映画では、誰もがパーフェクトになれる楽園「パラダピア」が舞台であり、パラダピアでは全員が 5 時に起き 8 時に寝るという規則正しい生活を送り、誰もが運動も勉強もできる理想的な存在になれるとされていた。ところが、マリンバとハンナからこの世界はまやかしであり、理想の姿になるのではなく、三賢人とそのバックにいるレイ博士の都合のいい存在になるように操られているだけなのだと言われる。このように本映画では理想世界自体が幻想で、裏に思惑が隠されていたということが大きな特徴である。

歴代映画の中では、ある程度の理想社会を紹介され、それを外部または内部から脅かす存在とのび太たちが闘う姿が描かれてきた。例えば、「のび太とアニマル惑星」では、水と空気と光から食物を合成し、完璧な汚染処理と太陽光発電を行うことで環境にとって理想的な社会であるアニマル惑星を侵略しようとするニムゲとの闘いが描かれている。他にも地球と対比される世界として「のび太と雲の王国」では環境に優しい世界が描かれていたり、「のび太のねじ巻き都市冒険記」や「のび太のふしぎ風使い」などのようにスタイルや文明の違いはあるにせよ平和な世界が描かれていたりする。一方、本映画のように描かれている社会そのものに裏があり、夢物語であったという映画はあまりないと思われる。強いて 1 つ挙げるとするのなら、「のび太とブリキの迷宮」であろう。この映画では、文明の利器の発明により、人々は仕事をする必要もなく、道具の力で便利な生活を送ることができるという人々にとって理想的な世界が描かれている。しかし、ロボットが高度な技能を持った結果、人間に対する反乱がおこってしまう。結果として、のび太たちの手によってロボットの反乱は鎮圧され、これまでの便利な道具も使えなくなってしまうが、ここから新たなスタートを切ろうというメッセージとともに終幕を迎える。この映画は、人々が利便性を求めすぎた結果、人々が道具に依存してしまい、これまで下の立場で

あった道具との能力における上下関係が逆転してしまった結果、反乱がおこってしまった。これは、人々にとっての理想的な世界の行き過ぎへの警告と見なされ、本映画との類似点が見られると考えられる。一方、この映画ではあくまで行き過ぎた科学技術への警鐘であり、科学技術の発達した世界自体を否定しているわけではないと考えられる。本映画は、パーフェクトな世界自体の否定であると捉えられるため、この映画とは異なるスタンスであると考えられる。

前述のように本映画では、理想的な世界と思わせておいて、その世界自体を否定するという構成であるため、のび太たちにとっても最初は味方であったが後に敵になるという立場の転換が見られる。これまでの映画でも、味方であると思われた存在が、のちに地球を侵略しようとするを知り敵であることが発覚するという転換が見られたこともある。しかし、本映画のように敵として捕らえられたり、世界自体と敵対したりするように、全面的に敵、味方の立場が入れ替わることはなかったと考えられる。この点は、ソーニャの立場の複雑さにも表れている。最初、ソーニャはパラダピアに忠誠を尽くす存在であったため、のび太たちがパラダピアに近づいた際は敵として撃退し、その後は味方としてパラダピアの仲間として迎え入れている。しかし、のび太たちがパラダピアと敵対することが判明してからは敵となり、最終的にソーニャ自身がパラダピアに囚われていたことを自覚し、のび太の味方に回る。のび太たちにとってみれば敵と味方が入れ替わる存在であったものの、ソーニャ自身の変化は1回だけであり、敵味方の頻繁な入れ替わりは、のび太たちの立場の変化の表れであると考えられる。

ここまで、本映画の特殊性や歴代映画との類似点について述べて来た。次の章では、本映画に込められたメッセージについて考察する。

### 3. 何を伝えたかったのか

本映画に秘められたメッセージは、ずばり否定的側面を含めた受容であると考えられる。以下では、この結論に至った根拠について述べる。

まず、本映画の内容についてもう一度振り返る。本映画では、のび太たちが誰もがパーフェクトになれるという楽園パラダピアで生活を送ることになる。次第に、静香、スネ夫、ジャイアンは心の落ち着いた理想的な姿になっていくが、のび太だけは一向に変化が見られない。ところが、ハンナたちによってこの島が実は人の心を操る研究の実験台であることを告げられると、静香たちの変化についてのび太は違和感を覚えるようになった。

この映画で、静香は強情なところ、スネ夫は意地悪なところ、ジャイアンは乱暴なところがあると述べられている。これらは、いずれも否定的な側面であり、矯正すべき側面に思われるかもしれない。実際、パラダピアで生活を送る上で、否定的な側面は消滅し、理想的な人物に近づいたかのように見えた。しかし、それは同時に個性の消滅でもあると言える。静香はともかく、スネ夫、ジャイアンは意地悪であることや乱暴であることがキャラクターの重要な一側面であると言える。その側面が消滅することで、いわゆるスネ夫や

ジャイアンは失われ、単なるスネ夫やジャイアンの姿や声をした無個性な人物に成り果ててしまったと考えられる。個性の消滅ともいえるシーンは他にも存在する。パラダピアに着いた際、のび太たちはパラダピアの住人たちが生活しているところを案内してもらった。その際、陶芸をしている住人たちは、出来上がったコップにただ一直線に線を引いているだけであり、コップの形も皆同じであった。このシーンから独創性が消滅していることがうかがえる。独創性は、常識から外れることから生まれるものであり、見方によっては足並みを外す人であると否定的に言うことができる。よって、否定的な側面の消滅は、同時に個性を失うことにつながるのである。

ここで、本映画の疑問の1つである「なぜのび太だけが催眠にかからなかったのか」について考える。結論から言うと、のび太はダメな自分をどこかで受容できていたからであると考えられる。通常、自分のダメな側面は直したい、認めたくないと思ひ、ありのままに受け容れることは難しいと考えられる。しかし、のび太は無意識のうちにそれができていたのではないかと思った。これまでの映画でものび太は登場人物の弱音に寄り添い鼓舞する役割を果たしている。例えば、「新・のび太の大魔境~ペコと5人の探検隊~」において、チップの両親や国を守れなかった自分が情けないと卑下するペコに対し、いつも自分のことで精一杯なのにペコは偉いと自分のことをありのままに開示し、ペコを励ますシーンが見られる。さらに「のび太の宇宙小戦争 2021」では、1人で悩むパピに対し、自分は頭もよくないし不器用だし度胸もないけど、パピにできないことが何か1つくらいできるかもしれないと自分の無力さを認めた上で、パピに自分たちをもっと頼るように促している。これらのシーンから、のび太は自分の否定的な側面を認めているが、それを完全に悲観的にとらえているわけではなく、自分のできる範囲で精一杯のことをやろうとしていると考えられる。また、映画で静香たちを催眠から解放する際にも、3人の否定的な側面を認めつつも肯定的に言い換えることによって、3人に否定的な側面を含めた受容を促している。以上より、本映画で強調されていたことは、否定的な側面を含めた全人的な受容であり、のび太はどこかでそれができていたことが過去の映画で見られ、その結果催眠の影響を受けなかったと思われる。

#### 4. 終わりに

ここまで、本映画についての特異性やメッセージについて自分なりの考えを述べてきた。実際、カウンセラーを目指している身として、自分のネガティブな側面に目を向けることは難しいことで、そこから逃避することあるいはなくなることを望むことは自然なことであると思われる。しかし、全人類が理想的な姿になったとするならばそれは個性の消滅であり、かえって人間らしさを失うことになると思われる。否定的な側面は個性の裏返しであり、過度な矯正をする必要はなく、日常生活に適応できる範囲に最小限留めておくだけでよいと思った。否定的な側面こそが人間を人間たらしめている根本であり、人はそれを「個性」と呼ぶのだ。これが本映画のメッセージであろう。